

先週の礼拝メッセージ(2023年11月26日) ベン牧師

「もし洗わないなら」 ヨハネによる福音書 13:3-15

イエス様は、ご自分が十字架にかかることをすでにご存知で、最後の晩餐の時を弟子たちと持たれました。そこでまず最初になさったのが、弟子の足を洗うということでした。

イエス様が、最後の晩餐の中で弟子たちに行いなさいと命じられたことが二つあります。一つは主の晩餐、聖餐式で、もう一つが足を洗うということです。現代の教会の中にも、洗足式といって、この儀式を行う教会もあります。イエス様が行いなさいとおっしゃった意味を考えると、聖餐式はイエス様の十字架を覚えるという意味で教会が行うことでありますが、足を洗うというのは、弟子たちの働きが記されている使徒言行録には一度も記されていませんので、それは文字通り水で足を洗うということではなく、そこには霊的な意味があることがわかります。

当時、人を招いた時、客の足を洗うのは奴隷の仕事でした。奴隷がない場合は、その家でいちばん位の低い人が洗うのが決まりでした。しかし、最後の晩餐では、一同の足を弟子たちは誰も洗わなかったのです。つまり、弟子たちの誰もが自分がお互いの中で一番低い立場にあると思っていなかったのです。それどころか、この直前、彼らは自分たちの中で誰がいちばん偉いかを論じ合っていたのです。誰も自分が足を洗う立場には立ちたくなかったのです。

ところがその時、イエス様が立ち上がり、弟子たちの足を洗い始めたのです。ペトロが「私の足など、決して洗わないでください」と言うと、イエス様は「もし私があなたを洗わないなら、あなたは私と何の関わりもなくなる」とお答えになりました。この答えはとても興味深いものです。当時、客として正式な場に招かれた者は、まず水浴して全身を清めました。これはきよめの儀式で宗教的な意味のあるものです。しかし、体は清くなくても、道を歩いていくうちに足は汚れ、もしかしたら、道自体が汚れていたり、汚れたものを踏んだりしているかもしれないという懸念から、家に入ったら足を洗うという、きよめの儀式をすることは当たり前でした。ということは、イエス様が弟子たちの足を洗われたということは、衛生面ではなく、罪をきよめるといった霊的な意味があることがわかります。イエ

ス様の十字架によって罪赦され聖くされた者でも、その歩みの中で罪に汚れてしまうことがある。もし罪を犯したままにして、イエス様のもとに来て洗っていただかないなら、やがて信仰を失い、主と関わりのないものとなってしまいますよという意味があるのです。

聖書には、私たちに悔い改めを促す言葉が多く記されています。原語では悔い改めとは向きを変えるという意味ですが、日本語の「悔い改め」は、罪を悔い(すなわち神様に罪を告白すること)、行いを改める(向きを変える)という両方を一つの言葉として記しています。それは大切なことです。このどちらかを欠いても、正しい悔い改めとはなりません。私たちが信仰の歩みをしていく中で犯してしまう罪については、大小を問わず、イエス様のもとにいて悔い改めるべきなのです。イエス様は必ず赦してください。イエス様は、七度を七十倍するまで赦しなさいと私たちにおっしゃいました。(マタイ 18:22) それは、イエス様ご自身が私たちの罪の告白を七度を七十倍するまで、つまり、何度でも赦してくださるお方だからです。だから私たちは、互いに足を洗い合う、つまり赦しあうことができるのです。

「互いに親切で憐れみ深い者となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」(エフェソ 4:32)

イエス様が命を捨てて私たちを愛して、赦してくださったお互いなのです。イエス様は、クリスチャンになってからもどれだけ罪を犯したかされない私たちの足を洗ってくださったのです。だからこそ、そのようにお互いが赦しあい、愛しあい、助け合っていくのです。赦すということは、赦された者にしかできないことです。そして私たちクリスチャンはイエス様が十字架で私の罪を負って死んでくださったことにより罪が赦された者です。また、日々の歩みの中で犯す罪も、心からの悔い改めによって赦されている者です。

イエス様は最後の晩餐の始めに、足を洗うということによって罪の赦しを模範として見せて下さいました。私たちも、罪が示されたときは、心から十字架を見上げて悔い改め、赦しの確信をいただき、兄弟姉妹とも互いに赦しあい、そのようにして主に喜ばれる教会を共に建てあげていこうではありませんか。